

# 校長室通信

令和8年3月25日号  
志免町立志免西小学校  
高良 祐治

令和7年度の学校生活が終わりました。24日の修了式で、修了証を子どもたちに渡し、各学級では、担任から通知表を渡しなが、一人一人の1年間の頑張りを伝えました。次回、登校するときには、一つ上の学年になっています。春休みの間に、短くなった鉛筆や少なくなった絵の具の補充など学習道具の準備はもちろん、この1年間の成長を実感し、次の学年でどんなことに挑戦したいのか考えておくなど、新年度に向けた心の準備もしておいてほしいと思っています。

## 誰と一緒にするのか？

修了式の日、各学級では、これまで共に過ごしてきた友だちや先生と、この1年間を写真や動画を見ながら振り返り、感動(?)の中、“学級じまい”を行いました。

そして…、この春休み、始業式が近づいてきて気になるのが、「クラス替え」だと思います。「仲良しの〇〇ちゃんと同じクラスになれるのか」「よく知らない人と同じクラスになるのは怖い」など、楽しみと心配が入り混じっているのではないのでしょうか。親も「友だちはできるのだろうか」「仲間外れにされたりしないだろうか」と、心配ばかりが募ってきます。

本校は、各学年5クラスもあるため、おおよそ5分の4は前学年とは違う子どもたちと同じクラスになることとなります。これを「友だちと離ればなれになる」ととらえるのか、「よりたくさん友だちをつくるチャンスが増える」ととらえるのかで、新学年のスタートへの心持ちも変わってくると思います。

ほとんどの子どもたちが進学する志免中学校は、志免中央小の子どもたちも進学するため、各学年9クラスありますし、その先の高校や職場では、さらにバラバラになっていきます。そしてその都度、新たな別れと出会いがあつて、人間関係を構築していく必要に迫られます。

4月の初めは、学級の雰囲気もどこかよそよそしく、お互いが“どんな人なんだろう”と探り合っていたり、恐る恐る話しかけてみたりしている姿が見られます。休み時間になると、廊下や階段で前の学年の友だち同士で集まって話し込んでいる姿を見かけます。

しかし、いつの間にか“新しい”学級が“今の”学級になり、自分がその学級にいることが当たり前になっていきます。ぜひ、クラス替えを前向きにとらえていただきたいと思います。

## どんな先生なのか？

もう一つ気になることが、「誰が担任になるのか？」ということでしょう。「〇〇先生だったらいいな。」ということは、みんな思っていることだと思います。始業式の日子どもが学校から帰ってきて、初めに聞くのは、「担任は誰だった？」ではないでしょうか。

子どもや保護者から見れば、クラス替えも担任も自分たちでは決められないわけですから、「この1年間を占う！」くらい関心が高いことも理解できます。

私が初任者だった頃、音楽指導が得意な先生がいました。朝の会はきれいなハーモニーで始まり、授業の始まりや終わりの挨拶もハーモニー、帰りの会の最後も美しい合唱で締めくくっていました。また、話合いに力を入れて学級をつくる先生がいました。どの学習でも子どもたちが発言する機会をつくって、それをみんながしっかりと聴いていました。この2学級の“学級づくり”の方法はちがいますが、子どもたちが互いに認め、尊重し合う学級になっていきました。

もちろん初任者の私には、そんな技量はありません。周りの学級がどんどんまとまってく中、私の学級は落ち着かず、焦るばかりです。

いろいろ考えたり本を読んだりまわりに聞いたりしましたが、結局自分にあるものは「若さと元気」だけでした。手先や体全体を動かすような活動を授業に多く取り入れ、休み時間は子どもと走り回って遊び、隣のクラスの先生からは、「担任の声がうるさい」と言われるほど「若さと元気」で日々過ごしました。今考えれば未熟さだらけで、恥ずかしい限りですが、この必死さが子どもたちに伝わったのか、徐々に学級が一つになっていったことを覚えています。

学級は1年間かけて育ち創り上げていくものです。子どもも担任も個性を発揮し、4月からどのような学級が創られていくのか楽しみにしています。